



## 雑感

柿澤喜英

「えっ、もう俺の番!？」今回、同窓会から原稿の依頼を受けたときの率直な感想である。まだそんなに古参ではないだろうと思っていたのだが、大学を卒業してすぐにここに就職して、気がつけば確かに 26 年目に突入していた。

担任した生徒やクラブのOBからは、結婚式に呼ばれたり、子どもが生まれました、といった連絡を受けるのだが、こと自分のことになるといつも 15～18 歳の人間を相手にして戦っている（遊ばれている？）せいか、年を重ねていることを余り自覚していない。確かに着実に、髪の毛は白くなりかつ少なくなってきたし、体重は増加の一途をたどっている。また、担任している（かなり久し振りに、しかもスポーツクラス!）生徒の保護者は私とほぼ同世代か、場合によっては私よりも若くなってきた。しかし相変わらず日本史の講釈を垂れ、運動部にに関わり、住んでいるところは緑ヶ丘の駿台長屋。要するに、私の日常的な基本線が変わっておらず、私が時の流れに鈍感らしいのだ。

話は飛ぶが、5 月の中旬に、私の母校の同窓会が開かれた。高校卒業後 10 年毎に開かれているのだが今までの 2 回は欠席しており、今回 30 年振りに母校を見学し恩師や同級生に会ってきた。さすがにこれだけ期間が空くと、母校も駿高同様新築されており、これはある意味当然のこととして受入れられたのだが、同級生についてはそうは簡単にいかなかった。6 年間も一緒に過ごした奴ら（中高一貫の男子校です）なのに、余り変わらない奴から全く誰だか判らない奴まで、年齢に対して若く見える奴からすっかり老けて見える奴まで、全く人それぞれであった。ちなみに私は、体形を別にすれば、若く見えたらしい。

これも、ひとえに常に若い世代を対象に仕事をしているからで、生徒に遅れないようにして生徒から若さをもらっているからに違いないと、感謝している。

今回の原稿の依頼内容に「思い出に残る出来事、思い出に残る生徒、開校当時から現在までの学校・生徒の変わり様」などとあるけれど、日々の何気ない一つ一つの出来事が楽しかったり、嬉しかったり、残念だったり、悔しかったりで、なかなか絞ることができない。酒でも飲めば、「男子校時代は……」とか、「寮は……」とか、「ラグビー部は……」とか、「女子が入ってからは……」とか、「中学ができてからは……」とか、思い出話もできるのだろうが、なかなか上手くはまとめられない。

学校というのは、まさに“不易流行”の場なのだろうと思う。「集まり散じて人は変われど……」と言うが、私が古株だとすれば、その役目は、「……」の部分、“不易”の spirit を次世代に継承させることなのだろうと思う。OB、OG 諸君、頑張れ！日本の将来は君らにかかっている。期待してるぜ。せっかく出会った情縁（楢円?）の仲だ。俺もまだまだ頑張る。そして、飲み、校歌を歌おう。（この年齢になると、高校でも大学でも、やっぱり校歌は良いもんです。前述の同窓会でも締めは校歌でした。そして、フルに歌えたんだよね。）